小林人 こばやしびと Vol.23

魅力にあふれた霧島の情報を地域と連携して発信したい―

環境省　えびの自然保護官事務所
霧島錦江湾国立公園　霧島地域担当
自然保護官　森川 政人（もりかわ まさと）さん
Morikawa　Masato

「霧島は認識されていない魅力がいっぱい。今ある魅力の向上を地域の人と連携し、それを効果的に発信できれば」

霧島錦江湾国立公園の霧島地域担当として、活躍する森川政人さん28歳。国立公園の保護や管理、利用の促進など、霧島に関することに携わる自然保護官だ。えびの高原にある、環境省のえびの自然保護官事務所に勤務しながら、霧島を愛する地域の人々と連携した取り組みに意欲をみせる。

森川さんは東京都出身。近くの公園などで夢中で虫を採る少年だった。そこから環境保全に興味を持ち、広い視野で自然環境に携わる仕事に就きたいと環境省へ入省。昨年4月に霧島地域担当として赴任した。

そんな森川さんは、霧島の魅力を火山と植生だという。「新燃岳の噴火は、温泉など多くの恵みを受けてきた麓の人たちに、危険もある山だということを再認識させた。また一方で噴火により知名度と魅力も上げた。新燃岳を含め、火山がこれだけある場所はほかになく、世界に誇れる大風景、大自然に圧倒された」という。また、「新燃岳の噴火による降灰は、高千穂峰に降り注いだが、そこでの植生の変化は、霧島の新たな魅力となる可能性を秘めている。火山によってつくられた風景であることを実感できるのが霧島」と話す。花については「春の到来を告げるキリシマミズキや、世界で霧島のみに生育している固有種ノカイドウ、火山性の山に生育するミヤマキリシマなど霧島独自の花々が彩り、四季折々で楽しめる」とその魅力を語る。

▲国立公園内の植物は採取禁止のものが多い。それらを保護し霧島ならではの風景を守る

一方で、そういった魅力の効果的で効率的な情報の発信や、何かしらの要因で変化する植生のモニタリング、麓の畑などを荒らすニホンジカの対策など、課題も多いという。「霧島の魅力の向上のために、地域の人や自治体と連携、協力してみんなで取り組めれば」と話す森川さん。

7月には、閉鎖されていた多くの登山道が規制解除された。新燃岳を見ようと、登山する人も多いと感じている。事務所のあるえびの高原では、地域の人や施設と連携した自主防災連携組織を立ち上げた。えびの高原は、新燃岳の火口から約5キロ。施設の避難訓練や、噴火情報の屋外放送を行えるようにするなど、噴火に備えている。森川さんは「噴火警戒レベルは3のまま。いつ活発化するか分からないので、火山情報を得て、登山届を出すなど、ルールを守って霧島を堪能してほしい」と登山客へ訴える。

市内にある自宅では大好きな米と多くの生物を育む田んぼをつくって、地域の人の助けを得ながら米作りを楽しんでいるという。「小林市の人は温かく、住みやすい」と語ってくれた。

将来は「日本の自然環境を守り、絶滅危惧種がそうではなくなるように取り組みたい」と話す森川さん。自然を愛する彼の胸は熱く、霧島を見守る眼差しは温かい。

▲新緑が映える御池　▼小林からの県道1号線沿いのキリシマミズキ【森川さん撮影】